

2013年サンマ

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数				量							
	漁獲	産地	輸入	輸出	東京			消費支出 生(万円)	在庫	加工品		
					生	冷	開			塩干	塩蔵	缶詰
24	221.4	191.3	0.8	13.0	10.9	0.4	1.8	1,518	33.4	19.0	12.1	14.4
25	154.0	135.7	3.5	18.0	9.0	0.5	1.7	1,342	22.7			
%	70	71	445	139	83	127	99	88	68	0	0	0

年	価 格				全サンマ					
	産地	東京			輸入	輸出	水揚	価 格	消費支出 生(円)	
		生	冷	開						
24	78	411	328	473	184	98	218.3	78	1,091	
25	153	549	296	469	180	94	147.8	155	1,099	
%	196	134	90	99	98	96	68	200	101	

漁業・漁獲の動向と資源

1980年以降の日本の漁獲量は、13万～34万トンの間で増減している。2009年以降は減少し、2012年は21.8万トンであった。日本以外では、ロシア、台湾、韓国が棒受網およびそれに準じた漁法で漁獲しており、全漁業国での2012年の漁獲量は45.5万トンであった。2012年の日本の漁獲割合は48%であった。2013年漁期前調査による西経165度～日本の沿岸のサンマ資源量は309.9万トンと推定され、この海域の資源量は2012年（198.8万トン）より増加した（前年比155.8%）。親魚量は2003年が最も多く、2008年以降2012年まで減少傾向を示していたが、2013年は増加した（135.9万トン）。2013年の1歳魚資源尾数は前年の過去最低値から増加して、199億尾となった。資源水準は1980年以降のCPUEから判断した。2012年漁期のCPUEから、資源水準は中位、最近5年間の資源量の推移から資源動向は横ばい、と考えられている。

25年の漁獲量は前年（22.1万）をかなり下回る15万トン程度とどまった。

全サンマ登録の隻数は、153隻で前年に比べ3隻減少した。

今年のサンマ漁の解禁日は例年とは違い、5～10日ほどの繰り下げが実施された。北海道の流し刺網船は例年通り7月8日の出漁、5t未満棒受網船は7月15日、5～10t棒受網船（ロシア海域許可無し）は22日と流し網、棒受網とも前年と変化はないのですが、5～10t棒受網船（ロシア海域許可有り）は8月1日、大臣許可の10～20t未満棒受網船は8月10日、20～100t未満棒受網船は8月15日、そして20日には100t以上の棒受網大型船が解禁となった。

本年の操業に当たって、2週間単位での操業回数の制限措置が採られた。また被災した漁港での水揚制限措置も前年同様実施された。ロシア水域内操業も10月19日（10月20日早朝）で終漁となった。

本年のスタート時（7月）の漁は今年も道東近海で主に流し網の操業であったが、昨年以上に低調で平年を下回る漁であり、近年初漁期の漁は年々悪くなっている。また燃油の高騰もあって、漁場が遠くなると操業を休む船などもみられた。そうした初漁期の状況の中で大型船が出漁したが、漁は上向かず、8月の水揚量も近年では最も少なかった。この頃の漁場

は択捉南沖～東経154度と広範囲に形成された。その後、9月中旬頃から色丹南東沖に漁場が形成され漁船が集中して操業を行った。10月に入って漁場は徐々に南下傾向をみせはじめたが、道東沖合や三陸北部にはまとまった好漁場が形成されず、沖合の親潮第2分枝沿いに形成された。漁も水揚げも9月中旬ごろから徐々に増加し、10月まで増加傾向であった。11月に入ると三陸南部から常磐沖合に漁場が形成され、12月まで続いた。また11月の漁期終盤に入っても東経150度付近の沖合漁場へ出漁する船もみられた。本年は12月を除くとどの月も前年を下回る水揚げに止まり、結果前年をかなり下回り、近年でも最低の水揚げで、平成に入ってからでは、平成11年、平成10年位に続く低調な水揚げ量に終わった。

また本年のオホーツクでの漁獲は皆無であった。（前年：817トン）

魚体長は、本年は大型(29cm)の組成が引続きやや増加し、通算では大型60%（49%）、中・小型40%（51%）であった。

魚価は、越年在庫が少なかったうえに、初漁期から漁の極端な不振が目立ち、大型船が出漁して以降も漁の伸びがなかったことで、特に8月には極端な高値を示し、その後徐々に価格は下げたものの、周年を通じて三桁台で推移した。したがって産地価格は154円で前年（78円）を大きく上回り、11年ぶりの150円超えとなった。

在 庫 量

本年は3.3万トンと前年をかなり下回る越年在庫から始まった。こうした中、例年最も在庫が少なくなる7、8月に本年は近年になく少ない在庫となった。まだ福島原発事故の影響が完全に払拭されたわけではなかったが、輸出は多少回復したものの極端に伸びたわけでもなく、消化も鈍かった。多少在庫は多くなったが、例年漁が本格化する9月になっても在庫の急増はなく、10月以降、ようやく伸びが目立ってきたが、それでも近年では極めて少ない在庫量の推移であった。その結果越年在庫も2.6万トンと前年（3.3万トン）をかなり下回った。

平均在庫量は、低調な漁模様を反映し、2.3万トンで前年（3.3万トン）をかなり下回った。

消費地入荷量と価格

25年の東京中央卸売市場の入荷量は、生0.9万トン、冷0.5千トンで前年（生1.1万トン、冷0.4千トン）を鮮魚が減少し、そのあおりで冷凍が増加となった。

本年は、前年以上に産地では特大サイズが少なく、漁当初から小型サイズも多く、鮮魚の入荷は昨年を下回った。冷凍原魚は鮮魚が少なかったあおりを受け、秋口の大漁搬入もあって、前年をかなり上回った。

本年も東京消費地における入荷サイズは、当初、40尾サイズの入荷もみられたが、その後は45尾、50尾、55尾主体で推移した。

また、本年の塩干物の入荷は1.7千トンで前年（1.8千トン）を下回った。

本年も東京消費地価格のピークは例年7月にみられる。本年も7月にみられたが、それ以降は、漁が一向に上向かなかったこともあって、周年各月とも前年を上回る堅調な価格で推移した。

平均価格は生549円（前年：411円）、冷296円（前年：328円）、塩干469円（前年：473円）で、生は産地価格の高騰もあり、昨年を上回り、冷凍は、10月の安値を反映し、平均価格はやや下げた。塩干はほぼ前年並みで推移した。

また消費支出(1世帯当たり)をみると、価格上昇を受け数量は減少したものの、金額は前年並みを維持した。

輸 出 入

本年の輸入は、3,482トンで前年(782トン)を大幅に上回った。

一昨年の東日本大震災の後の在庫喪失により一時的に輸入の急増がみられたが、本年は、漁の不漁を反映し、12月に台湾からのまとまった搬入がみられた結果である。

輸出は平成4年をピークに近年減少傾向が続いていたが、このところ増勢基調に転じていた。しかし原発事故等による各国の「輸入規制」の影響も完全には回復せず、しかも漁不振とあって1.8万トンと前年(1.3万トン)を上回ったものの、上半期の輸出の多さを反映したものであった。

価格は、輸入180円(前年：184円)、輸出94円(前年：98円)であった。

輸出国は、ロシアがトップに返り咲き6,176トンで、続いてタイが3,914トン、中国が3,752トン、続いてベトナム、韓国となっている。